

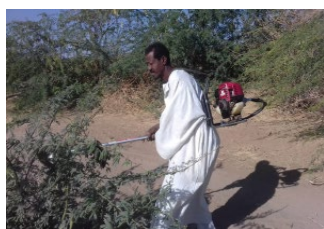
技術協力プロジェクトのスピンオフ

～予定調和を超えて、「かけあい」（Call and Response）が生む、もう一つの成果～

道具からはじまる何か

技術協力の現場では、さまざまな道具や機材が導入される。当然、それぞれには目的がある。木を伐採するためのノコギリ、調理研修に使用するためのオーブンや鍋、食器。しかし、プロジェクトから供与された道具がいったん現場の人びとの手に渡ると、当初の目的だけに使われるとは限らない。今回はスーダンで経験した、ロータリー式ノコギリと台所用品という、取り合わせの違う二つの道具からはじまったスピンオフを紹介したい。

一つ目は、外来樹種メスキートの資源管理からはじまった。繁茂するメスキートを単に除去するのではなく、伐採した木を薪や炭として利用しながら継続的に管理する。そのため、刈り取り頻度や高さを検討するとともに、ロータリー式ノコギリによる伐採や、種子の拡散を抑えるための破碎（crushing）など、作業の機械化も進められてきた。ところが、プロジェクトが供与したこのノコギリが別のところでも働きはじめた。農家が地域の重要な換金作物であるヘナの収穫に使いはじめ、最近ではコムギの収穫にも利用されている。その背景には、スーダン農村部の慢性的な労働力不足がある。収穫期に十分な人手を確保できないなか、農家が手元の道具を別の作業にも使ってみたのである。さらに、同様のノコギリを自ら購入する周辺農家も現れた。メスキート管理のための道具が、使う側によって本当の意味で「多目的」になったのである。



ロータリー式ノコギリによるメスキートの伐採風景

の一角で食堂をはじめるアイデアがあった。大きな投資ではなく、まず手元にあるものを使った小さな商売であった。そして、二人の料理の腕がよかった。評判は口コミで広がり、農業省以外の政府機関やドナー関係者も訪れるようになった。客が増えるにつれて雇用も増え、厨房や食事スペースも整備された。さらに、一人の女性の娘が別の政府機関で「2号店」を開き、周囲にも類似の小さな飲食ビジネスが現れた。研修用の台所用品からはじまった活動が、一軒の店となり、雇用を生み、さらに別の場所へと広がっていったのである。



供与した台所用品から着想した食堂のにぎわい

ロータリー式ノコギリと台所用品。ずいぶん違う道具だが、その後の展開はよく似ている。農家はノコギリの用途を広げ、役に立てば自分で購入した。農村女性は台所用品を商売の道具に変え、売れば人を増やし、店を広げた。そして、そのやり方を娘や周囲の人が別の場所で試した。こうした動きは、外から「主体性を持ってください」と言って生まれるものではない。自分で使い方を变える、自分で買う、商売にする、人を雇う、そして誰かがそれを真似する。そうした小さな判断の積み重ねのなかで、活動の主体は少しずつ現場の側へ移っていく。シリーズ第1回では、技術や経験が現場の生活や仕事に取り込まれ、地域のやり方と結びついていく過程を「内在化」「内製化」と表現した。

プロジェクトから供与された道具には、まず想定された用途がある。しかし、その先の使い方まで決まっているわけではない。ノコギリからヘナやコムギへ、台所用品から食堂や雇用へ。道具から何がはじまるかは、使う人たちの手に委ねられている。そんなところにも、技術協力プロジェクトのスピンオフが現れる。